

まい 埋やちよ

No. 40

千葉県八千代市
埋蔵文化財通信
2018. 11. 4
(平成 30 年)

特集 八千代市にやってきた旧石器時代の人々

はじめに

今、旧石器時代に熱い眼差しが向けられています。なぜなら、人類史を塗り替える発見と研究が相次ぎ、さらには日本列島にやってきた人々を知る上で重要な発見と研究もなされているからです。

一方、八千代市に目を向けると、市内にはたくさんの旧石器時代の遺跡があり、当時の人々が八千代市で活発な活動をしていたことがわかります。とくに、現在のゆりのき台の開発に伴って大規模な調査が行なわれた萱田遺跡群からは多数の旧石器時代の遺物が発見され、八千代市域だけでなく、北総地域の旧石器時代の歴史を知る上でも重要なものとなっています。

今回の特集では、現在の旧石器時代研究の動向を概観しながら、改めて萱田遺跡群で発見された旧石器時代の遺物に焦点を当てて、八千代市で最も古い時代に生きた人々の生活に迫っていきたいと思います。

近年の古人骨研究の動向

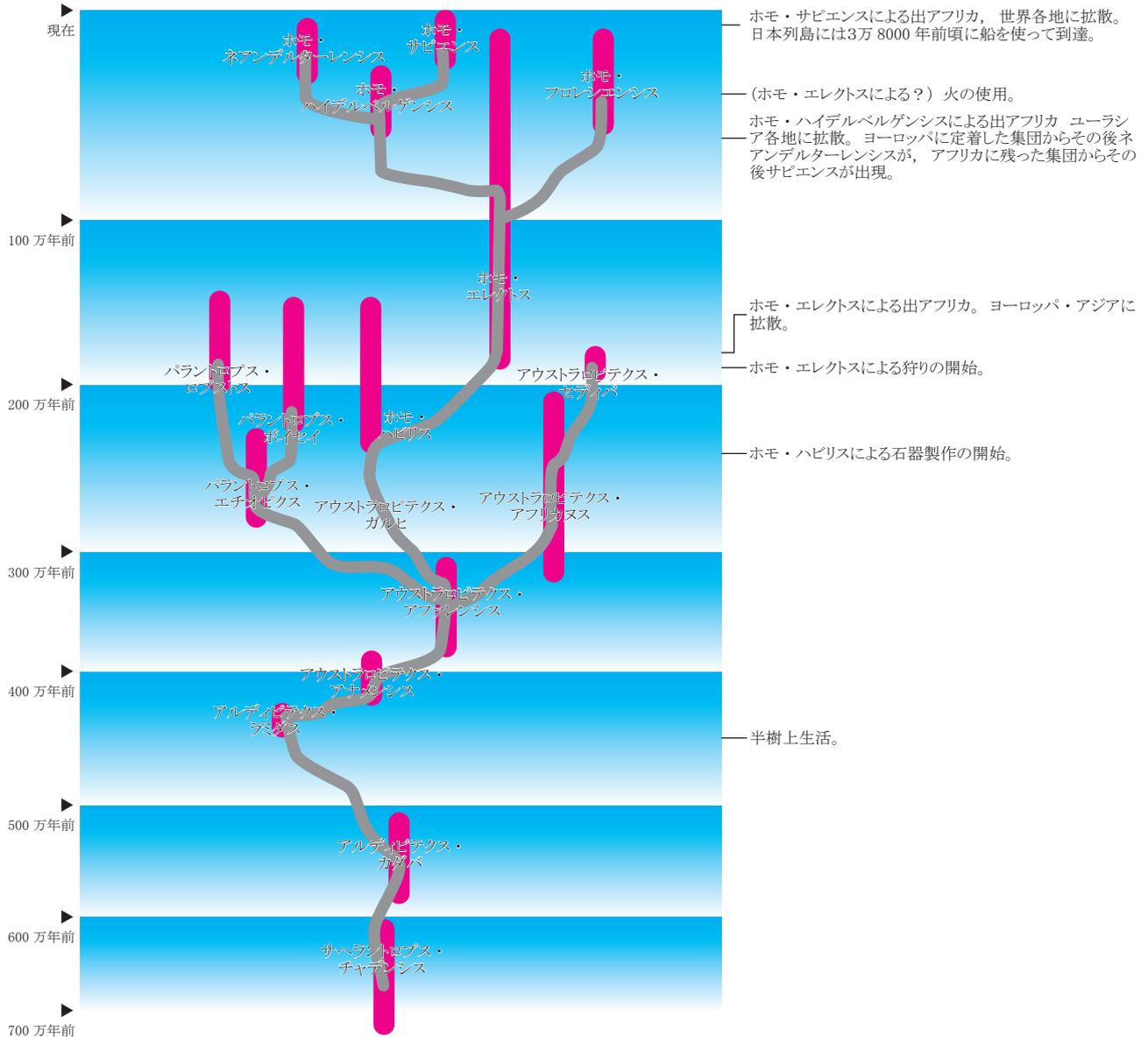
現在、旧石器時代研究は大きな進展を遂げています。たとえば、約 440 万年前に生息していたアルディピテクス・ラミダスの全身骨が調査され、骨の特徴から半樹上生活はんじゅじょうせいいかつをしていたことがわかりました。従来、初期人類は草原で生活していたと考えられていましたが、このことから森の中で生活していたと新たに考えられるようになったのです。

次に、我々サピエンスに目を向けてみましょう。サピエンスをめぐっては、DNA 研究によっ

て画期的な成果が出てきています。サピエンスが出現した頃、地球上には数種の人類がいましたが(第1図)、サピエンスは他種と交配しなかったと従来は考えられていました。ところが、ネアンデルタール人(第2図)の骨から遺伝子を抽出することに近年初めて成功し、サハラ砂漠よりも南に住む人々を除いたサピエンスがネアンデルタール人の遺伝子を2%程度受け継いでいることがわかったのです。しかも、ネアンデルタール人から受け継いだ遺伝子の中には寒い高緯度地域に適応するためのものが含まれており、このことから温暖なアフリカで出現したサピエンスが高緯度地域に進出するために交配は重要な出来事だったと考えられるようになってきました。なお、サハラ砂漠よりも南に住む人々にネアンデルタール人の遺伝子が認められないのは、サピエンスがアフリカを出て、中近東やヨーロッパに拡散する過程で交配が起きたためだと考えられているからです。

このように、ネアンデルタール人との交配が明らかとなったわけですが、これで話が終わったわけではありません。実は我々の遺伝子にはもう1種の人類の遺伝子も確認されているのです。それはデニソワ人と呼ばれている人類です。デニソワ人は比較的最近発見された人類で、西シベリアのアルタイ山脈に位置するデニソワ洞窟で発見されました。残念ながら発見された人骨は断片的で、全体像をつかむことはできていませんが、DNAの抽出に成功しています。DNA分析の結果、チベットやメラネシア、オーストラリアの先住民アボリジニ、そしてパプア

人類進化における主な出来事



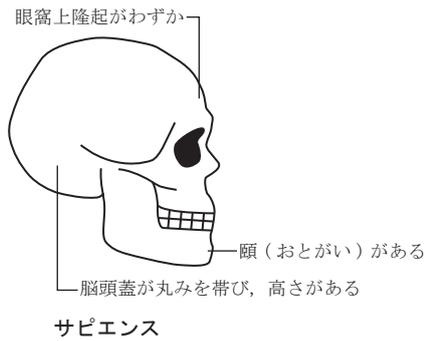
第 1 図 人類進化の系統樹

ニューギニアの人々にデニソワ人の遺伝子が 1～6%程度受け継がれていることが明らかとなりました。さらに、デニソワ人の遺伝子の中には酸素濃度の低い環境下で有効な役割を果たすものもあり、チベットの人々が高地に適応する上で役立った可能性も指摘されています。

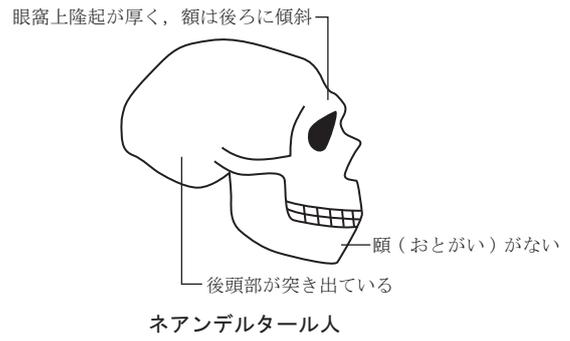
以上のように、最新の研究と発見によって初期人類が直立二足歩行を始めた環境は従来の説と異なることがわかりました。さらに、我々サピエンスが世界中に拡散し(第3図)、地球上の多様な環境に適応する上で他種との交配は重要な出来事であったこともわかってきました。

海を渡って日本列島へ

他種との交配を果たして世界へ拡散したサピエンスですが、どのようにして日本列島にやってきたのでしょうか。従来は、氷河期で海水面が下がり、現在の対馬海峡や津軽海峡が陸地化して大陸と日本が陸続きになっていたため、日本列島にサピエンスはやってくることができたと考えられてきました。実は旧石器時代のサピエンスが船を使っていた間接的証拠は日本で数十年前に既に見つかっていました。南関東地域の旧石器時代の遺跡からはたくさんの黒曜石が出土するのですが、その中に船で渡らないと行



サピエンス

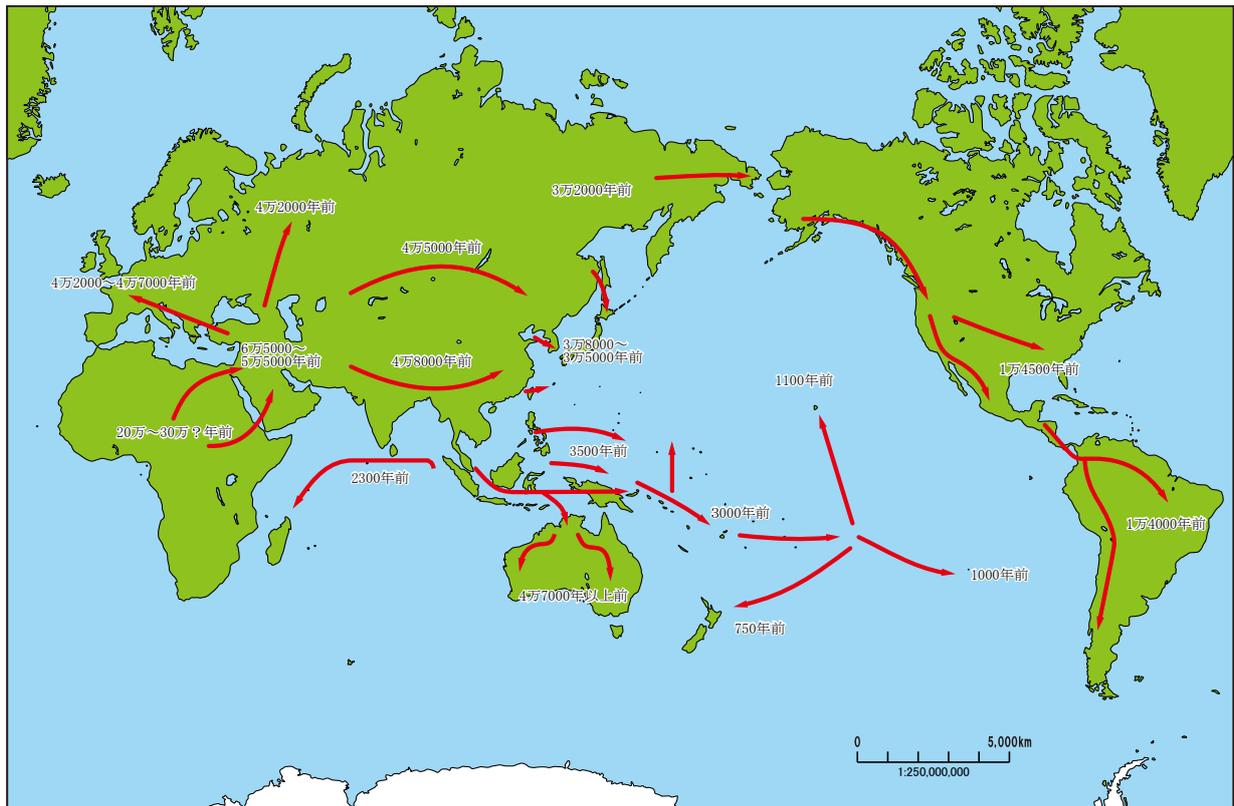


ネアンデルタール人

- ・ 生息年代：約 20 万年前以降
- ・ 身長：150 ～ 180 cm，体重：50 ～ 80kg
- ・ 脳容積は約 1400 cc
- ・ ネアンデルタール人と比べると，細身で背が高い。
- ・ 道具を作り出し，改良する能力に長けている。
- ・ 想像力の高さ。現生する動物をイメージしながら壁画を描くだけでなく，想像上の生物等も表現した。

- ・ 生息年代：30 万～ 4 万年前
- ・ 身長：150 ～ 170 cm，体重：55 ～ 85kg
- ・ 脳容積約 1500 cc，サピエンスよりも大きな脳。
- ・ 背は低めだが，筋肉質でがっしりしており，サピエンスよりも身体能力は高かった。
- ・ 道具を作り出したたり，改良する能力は高くなく，石器製作技術は数十万年間あまり発展しなかった。
- ・ 太陽光を吸収しやすいように肌は白い。
- ・ 寒さをしのぐために衣服を着ていた可能性が高い。また，貝殻などで作った装飾品も身に着けていた。
- ・ 死者を埋葬する習慣を持っていた。

第 2 図 サピエンスとネアンデルタール人の比較

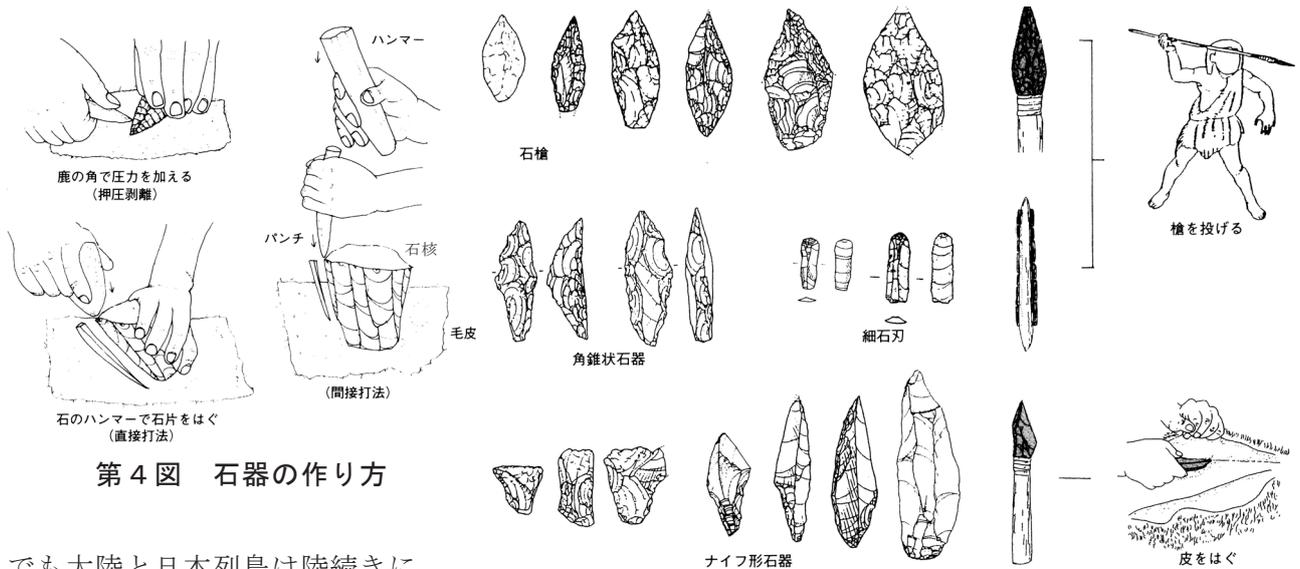


第 3 図 サピエンスの拡散ルート

くことのできない神津島産の黒曜石が含まれていたからです。しかし，船の発明が旧石器時代よりも新しい時代になされたという従来の常識

も影響したのか，この点が世界で注目されることはありませんでした。

ところが，現在は最も海面が下がった時期



第4図 石器の作り方

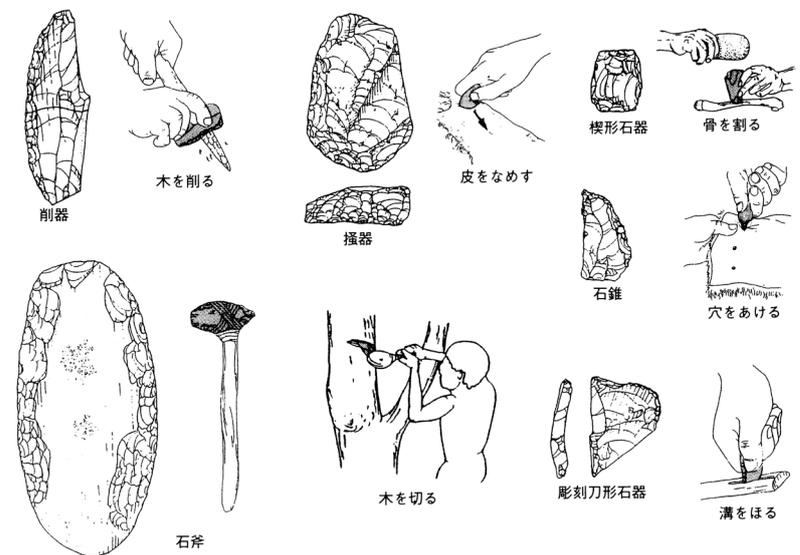
でも大陸と日本列島は陸続きにならなかったことがわかってきました。そのため、日本列島にサピエンスがやってくるには船を使って海を渡らざるをえなかったのです。

一方、神津島産黒曜石以外にも船を使っていたと考えられる考古学的・人類学的証拠が石垣島の白保竿根田原洞穴遺跡^{しらほさおねたばらどうけついせき}で近年発見されました。この遺跡からは海産物を加工した道具が見つかっています。さらに、旧石器時代の人骨には日常的に水に関わる生活をする人に見られる外耳道骨腫^{がいじどうこっしゆ}（サーファーによく見られるので「サーファーズイヤー」と言われています）も確認されています。このように、考古遺物と人骨から白保竿根田原洞穴遺跡の人々は海と深い関わりをもった生活をしていたことがわかりました。海の生活には船が欠かせませんから、彼らは船を使っていたと考えざるをえません。

以上のように、近年の研究成果と新発見で船を使って人々が日本列島にやってきたことがクローズアップされるようになってきました。

八千代市にやってきたサピエンス

約3万8千年前に海を渡って日本列島にや



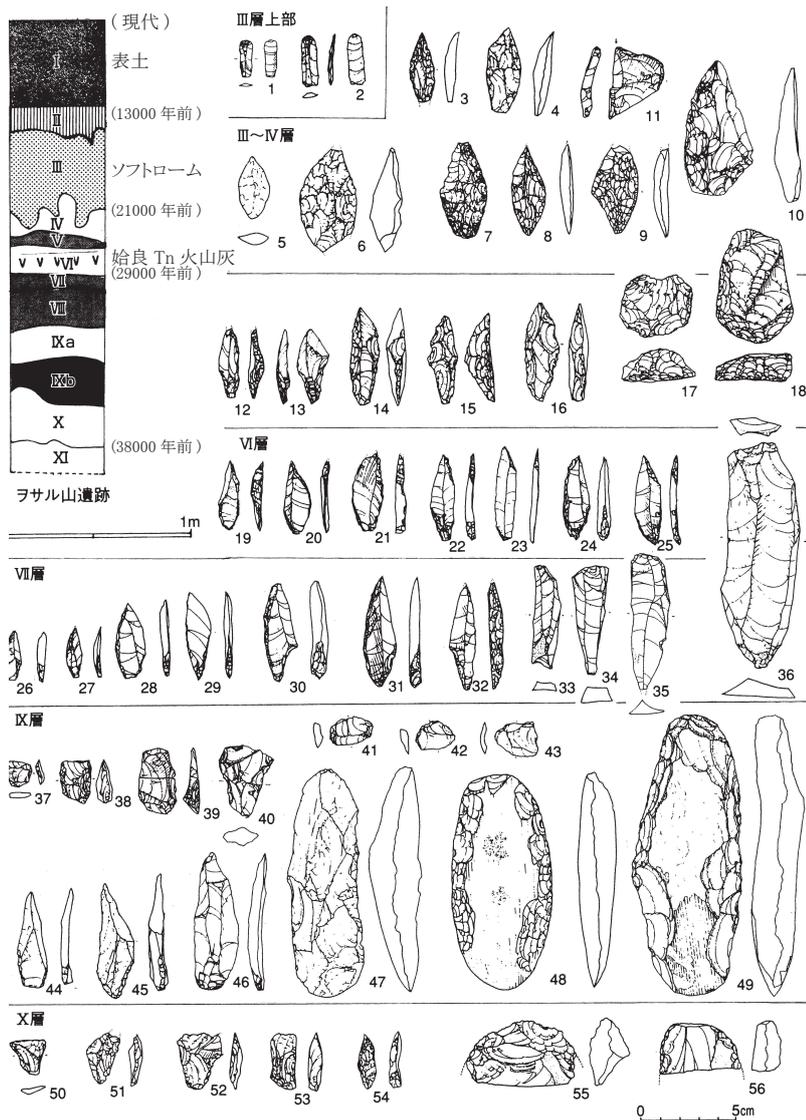
第5図 石器の使い方

ってきたサピエンスは急速に列島内に拡散し、八千代市にもやってきました。次に、八千代市にやってきたサピエンスの人々がどのような生活をし、どのような道具を使っていたかを見ていきたいと思ひます。

石器の作り方と使いわけ (第4・5図)

八千代市から出土した旧石器時代の道具の全ては石器です。世界各地の事例から石器以外にも様々な道具をサピエンスは使っていたことがわかっていますが、日本ではまだ発見されていません。

石器は河原や山で拾った石（「原石」^{げんせき}とい



第6図 八千代市内遺跡出土石器の移り変わり

います)を鹿の角や石によるハンマーで直接叩いたり、押し当てたりすることで薄い破片(「剥片」といいます)を剥すための石核を作ります。そして、石核から剥された剥片をもとに様々な形態の石器を作ります。なお、漠然と割って石器を作るのではなく、どんな石器を作るのかをイメージしながらサピエンスの人々は割っていたと考えられます。なぜなら、遺跡からは様々な形の石器が出土するのですが、それぞれの割り方は異なっており、意図的に作り分けていたと考えられるからです。こうして作られた石器は様々な用途に使われました。

このように、石器の作り分けが行なわれていたのですが、石器の種類は時代によって変化し

ます。次に、八千代市で生活していたサピエンスの人々がどのように石器を変化させていったのかを見ていきましょう。

石器の移り変わり (第6図)

石器の移り変わりを見ていく前に、地層に触れたいと思います。旧石器時代の遺跡はいわゆる関東ローム層、とくに立川ローム層中で発見されます。第6図にローマ数字で「X層」などという記載がありますが、これは立川ローム層を特徴ごとに細分し、それぞれに番号を付けたものです。

それでは、各層の石器の特徴について見ていきましょう。IX～X層は石器の特徴などに大きな違いはないため、一緒に記述していきたいと思います。八千代市に最初にやってきた人々は局部磨製石斧(第6図47～49・55・56)とナイフ形石器(37～46・50～54)を使っていました。局部磨製石斧という名前は、部分的に磨かれて作られているために名づけられました。この石器は斧という名が示

すとおり、木の伐採に使われたと考えられています(第5図)。一方、ナイフ形石器は形がナイフに似ていることからこの名前となりました。ただし、第6図37～43・50～54は台形に形が似ていることから台形様石器と呼ばれていて、ナイフ形石器とは別物だという意見もあります。ナイフ形石器(台形様石器も含めて)は槍先だったり、肉を切ったりするなど様々な用途に使われたと考えられています(第5図)。

VI～VII層では、台形様石器が使われなくなりましたが、その他のナイフ形石器は引き続き使われました(第6図26・28・30～32)。一方、局部磨製石斧も使われなくなりました。代わりになりそうなものも現在まで見つかっていない



第7図 石器石材の産地

ため、当時の人々がどのように木を切ったりしていたのかは未だよくわかっていません。

V層では、新たに角錐状石器 (第6図15・16) が出現します。これは細かな^{かくすいじょう}打撃をたくさん加えた複雑なもので、現代の錐のように先端が尖っており、用途も同じだったと考えられています (第5図)。

III～IV層になると、さらに複雑な加工が施された^{やりさがたせんとう}槍先形尖頭器 (第6図3～10) が出現し、その後には細石刃^{さいせきじん}が出現します。用途としては、槍先形尖頭器が槍先、彫刻刀は木に溝を彫

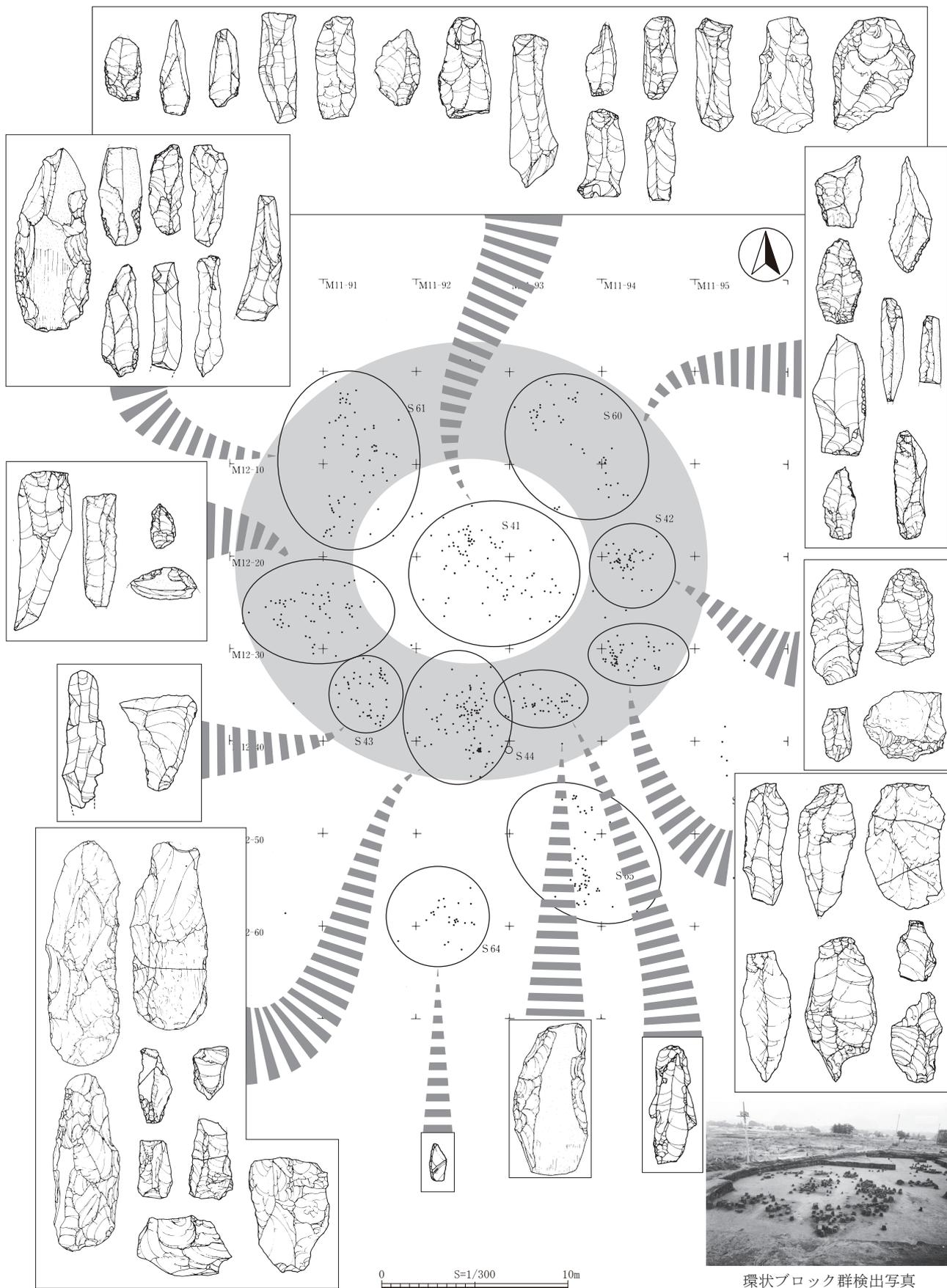
るため、そして細石刃はたくさん^{たくさん}の刃を木にはめ込んで鎗として使われたと考えられています (第5図)。

以上のように、石器の移り変わりを見てきました。時代が新しくなるにつれて複雑な石器が現れていることから、石器製作技術が徐々に高度になっていったと考えることができます。ところで、第3図で示したように、ネアンデルタール人は数十万年間にわたって石器製作技術を高めることをしませんでした。これがネアンデルタール人が世界中に拡散できなかった要因の1つではないかと考えられています。なぜなら、道具の改良とは環境に合わせて様々なものを生み出すことでもあるからです。同じホモ属でありながら、道具を改良して新しいものを生み出し続けたサピエンスと、それをしなかったネアンデルタール人。そこに運命の分かれ道があったのではないかと考えられています。

石器に適した石材の入手 (第7図)

石器を作るには適した石材を手に入れなくてはなりません。そこで、八千代市で活動していたサピエンスが石材をどのように手にしていたのかを見ていきましょう。

市内で出土した石器の石材としては、黒曜石やチャート、黒色緻密質安山岩、流紋岩、メノウなどが認められます。黒曜石は栃木県高原山と長野県和田峠、箱根山の畑宿のものが確認されています。黒色緻密質安山岩は栃木県の半蔵山が原産地、メノウもおそらく現在の栃木県が



環状ブロック群検出写真

第8図 八千代市坊山遺跡で検出された環状ブロック群

原産地と考えられています。一方、チャートの産出地は様々なところにあり、どこで手に入れたのかを明らかにすることはできません。

次に、当時の人々がどのようにしてこれらの石材を手に入れたのかを見ていきましょう。実は、八千代市内で出土した石器の中で石核は少なく、ナイフ形石器といった製品や剥片が多数を占めています。一方、栃木県に近づけば近づくほど石核の数は増え、しかも大きくなっていきます。当時の人々は1つの場所に長く住むことはなく、遊動生活を送っていたから、栃木県などで石器に使うための原石を手に入れ、それを消費しながら徐々に八千代市域を含む北総地域にやってきて、石材が尽きる前に再び原産地へと向かったのだと思われます。

このように、サピエンスは「石無し県」という環境下にあっても巧みな戦略でその問題を解決して適応し、生活していたのです。

環状ブロック群という不思議な輪（第8図）

ところで、八千代市にサピエンスが来て間もない頃、八千代市坊山遺跡で「環状ブロック群」という不思議な輪が形成されました。遺跡を発掘調査すると、石器が濃密に分布する箇所があり、それをブロックといいます。このブロック群が環状になるため、その名がついたわけです。この環状ブロック群は北総地域で多く発見されており、この地域の特徴の1つと言ってよいかもしれません。

それでは、こうしたブロック群はどのようにして形成されたのでしょうか。実は、その理由を述べるのが難しいのです。現在ブロックをイエ（テントなどの簡易なもの）の跡だと解釈することが多く、このことから環状ブロック群はノウマンゾウなどの大型哺乳類を狩るために複数の集団が一時的に集まった集落、複数の集団が石器・石材を交換するために一時的に集まった場、縄文時代の環状集落と同類といった解釈が出されていますが、未だ決着はついていないからです。そもそもブロックはイエの跡なのかという疑問も出されています。

おわりに

人類は約440万年前に直立二足歩行をしながら半樹上生活を送っていました。その後草原に降り立ち、石器を使うホモ属が誕生し、最終的に我々サピエンスが登場しました。サピエンスは他種の人類と交配しながら世界各地に拡散し、道具を発達させながら多様な環境に適応していきました。そして、船に乗って日本列島にやってきたサピエンスは八千代市にまで至り、ここでも道具を発達させつつ、地域に適応した生活スタイルを生み出しました。八千代市の旧石器時代の遺跡からはこうしたサピエンスの環境への適応能力の一端を垣間見ることができます。また、環状ブロック群の謎が解明されれば、サピエンスの環境適応に対する理解はさらに深いものとなるでしょう。

このように、八千代市は千葉県の中の1つの市にすぎませんが、市内の遺跡を通じて人類史を知り、サピエンスという我々自身のことを知ることによって世界とつながることもできるのです。

図版出典

- 第1～3図：『NHKスペシャル 人類誕生 大逆転！ 奇跡の人類史』を参考に作成
- 第4図：『八千代市の歴史 通史編 上』を一部改変
- 第5～6図：『八千代市の歴史 通史篇 上』より転載
- 第7図：『八千代市の歴史 通史篇 上』を一部改編
- 第8図：『八千代市坊山遺跡』を改変

埋（まい）やちよ No. 40
—千葉県八千代市埋蔵文化財通信—
平成30年11月4日
編集・発行 八千代市教育委員会
教育総務課 文化財班
八千代市大和田138-2
☎ 276-0045 ☎ 047(481)0304

